

## 『引揚げ文学論序説』へのコメント

熊木 勉

熊木と申します。コメントを二十分以内ということではございまして、何かを論ずるということを前提に私の考えを申し上げるというものではありませんが、『引揚げ文学論序説』を受けとめるというテーマで私自身がこの本を通じて感じたことをお話させていただくことにいたします。原稿を書いてきたものがございまして、これを読みあげる形でコメントとさせていただきます。

日本という帝国の崩壊というのは、なるべくしてそうなった帰結だと考えますが、その時代を深く肉化、身体化して記憶とともに自らの内部に何かを抱え込まなければならなかった人々に、私は抑圧者の視線をどこかに持っていたのではないかと自省せざるを得なかったというのが、この本を読み始めながら感じた最初の印象でした。と申しますのは、引揚げに関する文学、あるいはそれにまつわる文学に「近寄りがたい」妙な距離感、一定の距離を置きたい、彼らの傷や内的負担を直視するのを避けたいような感情を、無意識のうちに持っていたことに徐々に気づかされたからでした。ほかでもなく、植民地期における日本人による朝鮮人への無礼、蔑視、さらには現地の人々の生活文化に関わるような事柄に対してまでも見下した表現をばばからなかった「無頓着な日本人」生活者たちの文章に、私がいささかなりとも触れて来たからかもしれません。時として、私はそうした文章に嫌悪感を抱かざるを得ませんでしたし、少なくとも積極的に文章を読もうとする姿勢を持たなかったことは告白しなければならないのだろうと思います。

当然ながら、そうした支配者然とした文章は実際に存在しましたが、一方で何の疑問もなく、朝鮮を故郷として自分の身体に刻み込んだ人々が確実にいたということ。そして、彼らがのちに引揚げという移動を通じて感じなければならなかった疎外感、差別、表現しないことでしか帝国後の日本に対峙することのできなかった葛藤と周囲からの無理解を、私はあまりに見過ぎてきたのではないかと、自問せざるを得ませんでした。後藤明生は故郷である朝鮮について、「脳みそのどこかにべたりとはりついて離れない」という表現を『夢かたり』の「南山」という部分でしています。その地に生を受け、学び、暮らし、引揚げを経験した者には、そうした「べたりとはりついて」離れることのない、あるいは離れられない意識というものは、大なり小なり多くの人々に共有された感覚であったのではないかと思います。

ここで注目しておきたいのは、過去に根を下ろしていたとか、過去に自らが生まれた故郷であるという単純な言葉ではなく、べたりとはりついて離れないという感覚、どんと下に根を下ろすイメージではなく、身体に刻み込まれた時空間として朝鮮が本人に意識されているということです。故郷は厳として存在するのですが、一方で存在しえないという事実引揚げ者、その二世らは、これは後藤明生の言葉ですが、「ぼう然と」せざるを得ない感覚があったのだろうと思います。

私が当時の在朝日本人たちの文学作品を読んでいつも感じていたことに、「無頓着さ」というものがあります。私の専門分野は朝鮮の詩文学分野ですので、とりわけ詩歌においてその傾向を多くみて来たわけですが、私が読んできた在朝日本人らの詩や短歌などは、いずれも朝鮮を対象化するとどまり、朝鮮人らのその内部、内面へと一歩も踏み込もうとはしていません。風俗を歌い、貧しさを歌い、美しい風景や女性、婦人たちの生活を描くことはあっても、個の内面への視角はほとんど見られないのではないかと思います。

小説分野もおおむね同様ではないでしょうか。近年、湯浅克衛の研究が少なからず進展していますが、代表作「カンナニ」は抒情性や日朝の子どもたちの交流と葛藤、衝突の現実描写にすぐれ、私などは映画にすると面白いものになるのではないかと感じていますが、それでもこの小説の前提としてあるのは支配者と被支配者という関係性であり、日本語という「国語」の支配です。湯浅がそれでもこの作品ですぐれていたのは、カンナニが朝鮮語を学ぶように龍二に勧めたり、龍二なりに持っていた朝鮮の子どもたちへの生活や文化への好奇心、親近感と、日本人小学生らへの批判意識により、作家なりの公平性を追求していたところにあるのではないかと思います。しかし、多くの植民地期の小説は、朝鮮を舞台にしつつも、どれだけ朝鮮人の内面を意識し得たかは疑問としなければならないように感じます。

当時、在朝日本人と朝鮮人の間にはある程度の壁のようなものがあり、葛藤をはらむ微妙なバランスで両者の生活が成立していたように思います。だからこそ、日本人の側からは朝鮮人は風景の一部分のように描かれるのみという場合が多かったでしょうし、実は朝鮮の小説にも日本人はほんの小さな役割として登場することはあっても、物語の中心として描かれることは一部の例外を除いてはほとんどなかったように思います。日朝の文人は文人報国会ほか各種団体や同人誌などで親交を有しており、その人間関係は戦後まで引き継がれたケースが見受けられますが、小説にはなかなか中心的な人物として日本人は登場しません。交流があったとしても、文学として扱うには、限界があったということになるでしょうか。田中英光や<sup>キムサリヤン</sup>金史良の一部の作品のように文人の交流を描いたものはあります。

ただし、戦争期のいわゆる国民詩、戦争詩などは除きます。ここでは日本精神が高らかに歌われます。時局に対応した文学をどう考えるかは別途考察が必要となることでしょう。

ともあれ、こうした微妙なバランスの中に文学があり、戦後、韓国・朝鮮では親日文学への批判、あるいは解放の歓喜や建国への希望、日本の支配に対する強烈な揶揄というようなものが表出し、一方の日本では在朝日本人の文学、引揚げ者の文学は忘却という形のままに現在にいたることとなったように見えます。日本の引揚げ文学に限って言えば、それは忘却というよりも排他的な抹殺であったとさえ言えるのかもしれませんが。朴先生が示された、これまでの日本近代文学なるものが所詮「内地」中心文学ではなかったかという問いかけは極めて重要なものであったと思います。朴先生は安直な批判で事足りりとする論が目立つポストコロナル批評の転換をも迫っていらっしゃいます。あらためて、当時を生きた人々それぞれの一人一人が異なる、その「個」に立ち戻ってさまざまな生のありようを考える必要があるのであろうと思います。

もとより、二〇〇〇年代とくに二〇〇五年あたりからは、韓国では親日文学に関する研究も個々人のあり方に目が向けられる論が提出されはじめ、親日対抵抗の二項対立的な類型的理解

は克服されて来ているものと感じます。日本では、引揚げ文学も、近年関心が向けられて研究が進んでいるものと承知しています。資料集なども刊行され、入手が必ずしも安価で手軽にはいかなかった後藤明生の小説も、電子書籍などで手軽に読めるようになっていきます。類型化から個の多様性への動きは、日韓ともに少しずつ前進しているのではないかと思います。朴先生の引揚げ文学への取組みは、「序論」の名はついていますが、今後も重要な提言として生かされていくものと思います。

さて、朴先生の序説では、朝鮮文学は扱わないものとされていますが、本来、引揚げ文学というものをより広く帝国の崩壊と人的移動という側面から考えるとき、さまざまなケースを想定しなければならないのは言を俟ちません。日本や満州からの朝鮮人のいわゆる帰還文学—韓国では主として帰還（クィファン）文学という言葉を使うのではないかと思います—その帰還文学のありようをより具体的かつ多層的に見ていく必要があります、一方では逆に帰還しなかった、あるいはできなかった人々の文学というものも存在するものと思います。例えば金達寿（キムダルス）など日朝鮮人の文学、またロシアの極東地域から中央アジアに移住させられた朝鮮人の文学、さらには朝鮮に限らず台湾・中国などを含めた広い地域からの様々な形での帰郷に伴う文学、あるいはディアスポラの自意識の問題も帝国の後遺症として存在していると考えなければならないものと思います。

今後、帝国崩壊を前後する時代と、その時期の傷を描いた文学について、日本文学あるいは朝鮮文学、台湾・中国文学は、その枠組みを再構築する必要があるのかもしれませんが。朴先生の『引揚げ文学論序説』は内地のみに閉じこもりがちであった日本文学を、帝国の崩壊という大きなフレームから考える貴重なヒントを私たちに提供してくれているのではないかと考えます。

以上、私から簡単にコメントをさせていただきましたが、いくつかだけ、付言させていただければと存じます。

私の住む福岡には引揚げ者を受け入れた博多港があり、終戦後、多い日には一万人もの引揚げ者がいたとも言われます。引揚げ者のための受け入れ施設が強く要請されてもいました。博多湾では昭和二十年八月から二十一年六月までで七十五万二千人が帰国し、うち朝鮮からが三十七万四千人となっている統計も私が見た資料にはありました。これだけの人的移動がありながら、博多港の歴史も、今や忘却の段階に入りつつあるように感じます。『みなど』という同人誌がありましたが、最近なされたこの同人誌の復刻は、その意味で貴重なものであると思います。

もう一つ、引揚げの問題を考えると、朝鮮の場合は南北の問題、分断の問題にも関わってくることを忘れてはならないのだらうと思います。桂鎔黙<sup>ケイヨンムク</sup>「星を数える」などはそうしたことを考えるにあたっては参考になるのではないかと思います。文学者たちの言語の問題も念頭に置いておく必要があるかもしれません。朴寅煥<sup>パクインファン</sup>や金洙暎<sup>キムスヨン</sup>といった詩人たちの作品には、しばしば韓国語に若干の違和感がある場合があるとの指摘がなされます。知識人たちを中心とした日本統治下で学んだ世代の人々の日本語使用の問題、母国語への日本語の介入という問題がこれと関連すると言えるでしょう。

ふと思い出すことが一つあります。詩人の金顕承<sup>キムヒョンスン</sup>は戦後、大学教員となっているのですが、

彼の講義ノートというのを昔何冊か見たことがあります。その後、調査したいと思って探したことがあるのですが、現在のところこれらの数冊のノートは行方不明となっています。そのノートは私が見た記憶では、日本語で書かれていました。彼はそうした日本語のノートを見ながら講義をしていたということになるのでしょうか。作家や詩人によってさまざまではあったでしょうが、日本語がある程度体に染みついてしまっている、ということ。時として、文章や詩を書くときに韓国語に若干の不自由さえ生じ得たということ。とくに学問的な思考をするにあたって母語に日本語が一定部分介入しがちであったということ。あるいは日本語で考えながら、それを頭の中で韓国語に置きかえた場合さえあった、戦前の教育を受けた世代の文学者たち。そうしたことは歴史の一つの傷跡として、記憶しておくべきことなのだろうと思います。

申し訳ありません。ちょっと中途半端な形になってしまいましたが、時間が過ぎてしまったようです。ここまでにさせていただきます。